クロスケの知恵

守山みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クロスケの知恵

【Ｎコード】
Ｎ６８８５Ｚ

【作者名】
守山みかん

【あらすじ】
歩道の真ん中で負傷したカラスを見つけ、我が家に連れ帰り、クロスケと名付けて飼うことにした。段々と愛着がわいてくるものの、次第に怪我が良くなり、自由に飛べるようになったクロスケを離してあげることにしたのだが…

駅からアパートに帰る途中、歩道の真ん中でうずくまっている一羽のカラスに出会った。よく見ると、カラスの片方の羽根は真ん中辺りで異様な曲がり方をし、まるできちんと畳まれないでいる壊れた傘のようになっている。走行中の車と衝突したのか、あるいは余所見して電柱にでもぶつかったのか。何にしても、そのまま放っておけなかったので、私はカラスをアパートに連れて帰ることにした。カラスは最初、私を警戒し、不自由な体ながらも逃げようとジタバタ動き回るが、やがて観念したのか、私の腕の中に収まると、何も抵抗しなくなった。私は、カラスの後頭部の辺りを撫でてあげる。それまでこわばっていたカラスの表情が、少しだけ穏やかになったような気がする。

私がアパートにカラスを連れ帰ると、睦美は臭いモノを見るような目つきをするが、負傷していることを知り、途端に同情する顔に変わる。

「痛そうだね」と、睦美もカラスの頭を撫でる。

「しばらく飼ってあげようかと思うんだ」と、私は提案する。

「羽根が治るまでだね。でも、大家さんがなんて言うかなぁ。このアパートでは、動物を飼うのは禁止されてるから」と、睦美が不安顔で言う。

「大丈夫だよ。部屋の中でこっそり飼うし、コイツはケガして飛び回ることもできないから、近所迷惑にはならないよ」

睦美の了承を得ることができ、私はさっそくカラスのための寝床を作ってあげることにした。とはいえ、寝床といっても、空きの段ボールケースに古い毛布を敷き詰めただけの簡素なものである。

「ネコ飼うのと変わんないね」と、睦美が茶化す。

だが、サイズはピッタリだし、カラスもまんざらでも無さそうな顔をしているし、これでよしとしよう。

「名前、考えなきゃ」と、睦美が言う。割と楽しそうにしているのを見て、私は安心する。
「クロスケにしようよ。この子の名前」

さて、飼うことが決まったなら、いろいろと考えなくてはならないことがある。治療に関しては、私の力では、どうすることもできない。獣医を呼んであげるほど家計は裕福ではないし、あまり事を大袈裟にしすぎると近所に知られてしまうかもしれない。ここは一つ、長期間かかっても、自然に回復するのを見守ってあげるしか手はないようだ。
それから、エサをどうしようか。カラスは雑食だと聞くが、何をあげればいいのだろうか。
と、私が悩んでいるのをよそに、睦美がすでにお粥の入った椀をクロスケのそばに置いていた。クロスケは、大きなくちばしを使って、お粥の粒をコツコツとつついていた。
「病人には、やっぱお粥だよね」
睦美は、嬉しそうにクロスケがお粥をつつくのを眺めている。
鳴き声も何か手を打たなければならない。下手に鳴かれては困るので、くちばしを縛っておこうか。
と、迷うまでもなく、すでに睦美がくちばしに輪ゴムをかけていた。クロスケは、睦美に逆らいもせず、キョトンとした表情で睦美の顔を見つめている。
どうやら、私がいろいろと悩む必要は無さそうだ。考えてみれば、昼間は私は勤めに出てしまうため、クロスケの世話はほとんど睦美に任せっきりになる。
「放っておいてもいいよ」と、私は睦美に言うが、「そんなわけにはいかないもん」と、あっさり退けられてしまう。

それからというもの、睦美は精力的にクロスケの介抱に力を注いだ。クロスケもすっかり我が家に慣れ、気を使ってくれているのか、今

やくちばしに輪ゴムをかけなくても、鳴き声をあげたりするようなことはしなかった。
「クロスケは賢いんだよ」と、睦美は得意げに言う。
「カラスは、ズル賢いってイメージはあるよね」と、私は返す。
「ひどい言い方。クロスケはそんなんじゃないもん」と、睦美は頬を膨らませる。

クロスケが我が家に来てから、まもなく3ヶ月が過ぎようとしていた。
不自然に折れ曲がって痛々しかったクロスケの羽根も、すっかり元通りに治り、自在に動かしたりすることもできるようになっていた。
「元気になったね」と、私は言うと、睦美は少し淋しそうな顔をして、「うん」と頷く。クロスケとの別れが近付いてきていることを、彼女は悟っていたのだった。私は、睦美のそんな気持ちを察して、肩を抱き寄せる。睦美は、落ちそうになっていた涙を指先で拭う。
「明日は休みだから、クロスケを公園に連れていって、お別れしよう」と、私が言うと、睦美は素直に「うん」と、頷いた。

次の日の朝早くに、私と睦美はクロスケを近くの公園まで連れてきた。公園には、私たちの他に、誰も人影は見当たらない。
私は、腕の中に抱えていたクロスケを、ゆっくりと地面の上に降ろす。クロスケは、久しく動かしていない脚でよちよちと歩きながら、ウォームアップするように翼を大きく動かし始める。時折、私たちの方を見る。クロスケにも、別れの時がわかっていたのかもしれない。
次の瞬間、クロスケは大きく翼を動かし、そのまま天高く飛び立った。
「クロスケ……」
睦美は唇を咬みしめ、クロスケが飛び立つ様をずっと眺めている。
「カアアアァァァ！」

クロスケの別れの一声が轟く。クロスケは私たちの上を2、3回旋回した後、遠くの方へ飛び去っていった。

それから二日が過ぎた。落ち込んでいる姿も見せず、何事もなかったように振る舞う睦美を、私はいじらしく思った。今日は、帰りに睦美の好物である苺のショートケーキでも買っていってあげよう。私がケーキの箱を片手に家路を急ぐ途中、歩道の真ん中で丸くなっている黒い影を見つけた。

（まさか！）

私が近寄ってみると、それは一羽のカラスだった。片方の羽根は畳まれないでいる壊れた傘のように曲がっている。何かにぶつかったのか。カラスは、私が真近に近付いても少しも逃げようとせず、私に抱き上げられるのを待ち構えているように見える。

「おまえ、クロスケだな」と、私が言うと、カラスは「カァァ」と、イタズラ好きの子供のように小さく鳴き声を上げる。

（クロスケは賢いんだよ）

睦美のその言葉が脳裏に甦る。

「おまえってヤツは！」

私は苦笑いを見せると、負傷したクロスケを抱き上げた。

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6885z/

クロスケの知恵

2011年12月23日01時05分発行